

『金持百姓と貧乏百姓』(AT1535)について

——その日欧類話の文学的比較の試み——

竹原威滋

一 はじめに

よく歐米の昔話研究者より「日本の昔話はすぐれて伝説的である」とか、「ヨーロッパの昔話に比べて現実性を帯びている」とか指摘されるが、どうしてそうなのか、あるいはその指摘は当を得てないのか、を單なる印象批評でなく、実証的に明らかにする必要がある。そこで、この小論では、世界的に分布する『金持百姓と貧乏百姓』の日欧類話を、各モチーフ毎に文学的に比較することにより、この問題に答えてみたい。

日欧の民話の中から類話を選び出していくと、類話である限り、そこには当然、共通なモチーフが出てくるであろう。たとえば世俗的モチーフや宗教的モチーフ、トリックのモチーフなどである。マックス・リュティの理論によると、たとえ同じモチーフが出てきても、伝説と昔話ではそのモチーフの扱い方が違う。伝説では民間信仰のモチーフはそのままの形で生きており、その働きによって聴き手は超自然的なものに畏敬の念を持つであろう。ところが宗教的モチーフが、昔話というジャンルの中に取り入れられると、その本来の宗教的意味づけはなくなり、きわめて透明な抽象的なモチーフになる。以上のリュティの理論で、日欧の類話を光を当てて比較検討してみると、諸モチーフの扱い方により、おのずと、日本の類話

話が「すぐれて伝説的である」のかどうか、ジャンル論的に明らかになるはずである。

二 欧日類話・ウニボスと俵薬師

この話型はグリムの『小百姓』(KHM61)によって知られているが、文献上最古の、韻文のラテン語で書かれた話においては主人公をウニボス(ラテン語で「頭の雄牛」という意味)と言うので、西欧では一般に「ウニボス笑い話」と呼ばれている。ボルテリーポリカの『グリム昔話集注釈書』によると、この話型には次のようなモチーフが出てくるという。

「A¹ 鬼(やぎ、鳥)が飛脚として売られる。A² 狼が雄羊として売られる。B 金ひりろば(馬)。C ひとりで煮える鍋。D 食事代を払う帽子。E¹ 砂粘土(灰)が黄金として売られるか、交換される。E² 箱の中にお金が入っていたと言われ、番人が賠償せざられる。F¹ 牛の皮(鳥)が姦婦に、または、F² その夫に売りつけられる。F³ 牛の皮(鳥)が姦夫の隠れている箱と交換される。F⁴ 他の方法でお金が見つけられる。G¹ 死んだよう見せかけた妻を生き返らせる笛(バイオリン、杖、ナイフ)が売られる。G² 死んだ母親をもう一度殺されたように見せかけ、にせの殺害者がからだ袋賠償金が取り立てられる。H 主人公は羊飼いと入れ替わって、袋

(箱) からのがれ出る。J 羨望者が同じく水の中から畜を得ようとして水に飛び込み、死ぬ。」

ライエンの説によると、最古のラテン語の話は西暦九百五十年頃成立した。著者はおそらく、ロートリンゲンの教養のある吟遊詩人で、修道院の坊さんたちの娯楽のため、話して聞かせた(モチーフ構成は⁴F¹G¹B¹H¹J)。しかし、このラテン語の話にはグリムにある「間男と皮占いのモチーフ」(F¹~F⁸)は入っていない。これは「不貞の妻をのぞき見する話」として十三世紀にフランスで別個に発生し、さまざまに形でヨーロッパに広がり、イタリアの語り手が十五世紀にこのユニボス笑い話と結びつけた。

ユングマンの説によると、十六世紀に入つて、この話型は、妻を殺したように見せかけ、生き返らせる話(G¹)が、実際に死んだ母親を通りがかりの御者が引き殺したとして賠償金を取り立てる話(G²)になつてゐる。ところでウニボス笑い話は今日、ヨーロッパ全域に伝わり、広くアジア、中国、日本、インドネシアにまで伝播している。またアフリカのほとんど全域、アメリカ大陸でも北はグリーンランドからペルーにまで広がつてゐる。

ヨゼフ・ミュラーは、ヨーロッペの類話を一五七話集めて、この話型の発生と伝播について研究しているが、原形を次のように推定している。

「ある貧乏百姓に一頭の雌牛がいたが、死んでしまう。そこで百姓は雌牛の皮を市場に売りに行くが、途中で偶然多額のお金を見つける。そして隣りの金持百姓に『牛の皮を売つてこのお金を得た』と、うそをつくと、隣人は自分の雌牛をほふつて、皮を売りに行くが、ほんの少ししかお金を得ることができない(F⁴)。そこで隣人は仕返しをしようと思い、百姓を袋に入れるが、百姓はうまく通り

がかりの羊飼いをだまして、入れ替わり、その羊の群れを連れて、家に帰る。一方、羊飼いはもちろん、川に投げ込まれて、溺れ死にする(H)。次の日に百姓は隣人に会つて、「川の底で羊の群れを見つけた」と言う。すると、ねたみ深い隣人は自分も欲に目がくらんで、それを信じて川にとび込み、溺れ死にしてしまう(J)。」

実際の個々の類話にはこの原型に、先述のさまざまなトリックのモチーフがついてゐるわけだが、日本の類話は周知のごとく、「俵薬師」「馬の皮占い」あるいは「金ひり馬」が一部これに当たる。小沢俊夫氏によると、「馬の皮占い」は以下のところ青森、岩手、和歌山にそれぞれ一話ずつ採話されているだけで、実はアンデルセンの「大クラウスと小クラウス」、尾崎紅葉による翻案「大むく助と小むく助」が口伝えに民衆においてきたものと推測している。従つて、これは純粹な口承昔話とは言い難いかも知れないが、この小論では、民俗学的研究を意図しているわけでなく、主として日欧類話にあらわれた文芸意識の差異をジャンル論的に考察しようとしているので、あえて、グリムの『小百姓』とともに、文芸性のすぐれた岩手の『馬喰八十八』を取り扱うことにする。

使用テキスト(かつこ内はモチーフ構成を示し、□は各類話独自の導入モチーフを示す)

類話(1) 『グリム昔話集』より、六一番『小百姓』(□F²H¹J)

類話(2) G・ヘンゼン『民族は語る。ミュンスター・ランドの伝説、昔話、笑い話集』より、二〇五番『ウニボス』(□F²G²H¹J)

類話(3) K・ストレーベとR・T・クリスチャンゼン『ノルウェーの昔話集』より、四〇番『のっぽのベーターとちびのベーター』(□F²G²H¹J)

類話(4) 佐々木喜善『聽耳草紙』より、三九番『馬喰八十八』

($\square^2 F G^2 G H J$)

類話(5) 稲田浩一・福田晃『大山北麓の昔話』より、一〇二番

『嘘つき八兵衛』($\square^2 G H J$)

類話(6) 同右書より、一〇三番『錢垂れ馬』(B $\square H J$)

以上の欧日類話各三話を以下の章においてそれぞれモチーフ毎に比較分析する。

一二 導入モチーフ・主人公の嘘

(全類話)

ヨーロッパの類話では主人公のただ一頭しかいない牛について話される。類話(1)では小百姓が木製の小牛をつくり、牛飼いをだまして、生きた雌牛を手に入れる。類話(2)では雌牛を安く売り、食へるのにも困ったオイレンシュピーゲルがパン屋の丁稚をうまくだましてパンケーキを手に入れる。類話(3)では親の遺産を使い果したちびのペーターが、ただ一頭残った小牛を兄の所有する牧草地に行つて放牧するので、怒った兄は弟の雌牛を殺してしまう。

日本の類話では噂が重要なモチーフになっている。つまり類話(4)では主人公の八十八が長者の四十八頭の馬と自分のやせ馬一頭を連れて馬市に出て、人々に「やせ馬が長者の馬だ」と言いふらすので、腹を立てた長者は八十八のやせ馬を殺してしまう。類話(5)でも主人公の八兵衛が「うちの旦那はしぶんだけえ、うんだ、こがな牛持つて。誰それでえの牛は、貧乏人だけれども、もつとう大きな牛持つとる」と毎日言つて、噂を流すので、怒った旦那は八兵衛を殺してやるうと思う。導入モチーフにおいてヨーロッパの類話では嘘は主として、主人公の奇抜なトリック行為によって示されるが、日本本の類話では「松の木に鶴がひなをかけている」とか「旦那の家が

焼けている」とか、前述の「旦那の牛馬はやせっぽちだ」など、主として、主人公の噂ばなしによつて示される。

四 不貞の妻と牛の皮占い

(類話(1)(2)(3)(4))

このモチーフにおいてはヨーロッパと日本の類話は大変よく似ている。主人公は雌牛（または小牛、馬）の皮を売りに町に行く。その途中で夜（または嵐）になり、ある家に泊めてもらうことになる。そして不貞の妻をのぞき見して、やがて帰宅したその主人に皮占いをするのだが、占いをする者はヨーロッパでは皮にくるまれたカラスであり、日本では馬の皮そのものである。占いの対象には当然のことながら、日欧の食生活の違いがあらわれている。最後に間男の居場所が言いあてられるが、間男はヨーロッパではほとんどの例外なく牧師であるが、日本でも和尚であることが多い。

統いて、主人公は間男を箱から解放してやるのだが、日本の類話(4)では、主人公は間男に「このあと、決してあんな悪心を持つな。人の生命など取るべなどと思うな。また人のかかあなどを取るな」と諭している。これに対してヨーロッパの類話(3)では、牧師みずから言いつけるがれる「わしは本当に村の牧師なんだよ。百姓女のところに牧会しに来ていただけなんだよ。亭主が悪くて、荒々しいものだから、おかみさんはわしを箱に隠さなくてはならなかつたんですよ。わしはここに持つてある銀時計と金時計をあげる。それに八百ターラーもつけておく。さあ、早く出してくれ！」こういう牧師の厚顔無恥な態度の方が、日本の類話の教訓的な主人公の態度よりも笑い話というジャソルにはふさわしい。

そのあと、主人公は村にもどり、皮が高く売れたと村の人々に言

うわけであるが、日本の類話(4)では「近いうちに戦^{ハシマ}争が始まるといつて、陣太鼓を張るために」馬の皮が高く売れたというふうに、ヨーロッパの類話にはない理由付けをしている。このように日本の類話では理由付けを擧げることにより、たびたび話を（辻つまを含む）して）合理化しているので、話は一挙に現実味を帯びてくるのである。

五 再び殺される死体（類話(2)(3)(4)(5)

このモチーフの話も日欧とも基本においては同じである。何度も嘘^{ウソ}をつかれて、腹を立てた相手が、主人公を殺そうとするが、あやまって主人公のおばさんを殺してしまう。この老人殺しは實際には残酷なものであるが、笑い話ではその内実を失ない、むごいとは感じられない。主人公はその死体を馬に積んで、旅に出る。そして他人にもう一度殺させて、お金をせしめるのであるが、ヨーロッパの類話(2)では、病人を治さなくてはならない医者でさえ「あっ、あのばあをひいてしまえ！」と御者に命じている。またひいてしまったあとも、何の後ろめたさもなく、医者は主人公に「おい、まあ、事をおだやかに運んでくれ。あんたに車と馬をあげるから」と言う。ヨーロッパの類話では、ここでも医者はいかにも笑い話にふさわしい人物になっている。ところが日本の類話(4)では、主人公の年老いた母があやまって殺してしまったと思った隣りの旦那は、いよいよ青くなつて、「隣同志のよしみで、どうか内聞にしてくれ、その代りに金を百両出す」と言つてゐる。また類話(5)でも「まあ、そがにそのう、代官所や警察に願わざに、まあそのう、錢でこらえられるもんなら、錢でこらえござ」と必死で頼んでゐる。ここでも他人の

ことを気にする日本人の社会が反映している。つまり日本では笑いつて、陣太鼓を張るために」馬の皮が高く売れたというふうに、ヨーロッパの類話にはない理由付けをしている。このように日本の類話では理由付けを擧げることにより、たびたび話を（辻つまを含む）して）合理化しているので、話は一挙に現実味を帯びてくるのである。

六 羊飼い（盲人）と入れ替わつて、袋（俵）から解放される（全類話）

主人公はたび重なる悪事のため、とうとう袋（または俵）に入れられ、川に捨てられることになる。その際、ヨーロッパの類話では有無を言わせず、袋に入れられるのだが、日本の類話では、なぜ川に捨てられることになったか、を長々と説明する。たとえば、類話(4)では「お前のような悪者を生かしておいては、今後どんなにこの村が迷惑するか分からぬから、それで俺が旦那がお前を大川の淵に投げ込んで殺すのだ」と言う。これを聞いた主人公は「なるほど俺も八十八様だ。殺すというなら男らしく殺されてやるべえ」と答えられた。主人公が死を覚悟するというのは極めて日本的である。

川に袋を運ぶ途中、運搬人たちは、ヨーロッパの類話では忘れ物を取りに家に帰つたり、休憩のため飲み屋に入るのだが、日本の類話では「柿の木の下にお金を隠してある」という主人公の嘘を信じて、さがしに行くのである。日本の類話においては、富への志向が強く、話はそれだけいゝそら現実味を増してくる。

次に他人と袋を入れ替わるのだが、その相手はヨーロッパでは、すべて羊飼いであるのに、日本では盲人、それも魚屋である場合が多い。

次に入れ替わるときの口実は、ヨーロッパの類話では、より高い社会上の地位、たとえば村長、皇帝になれるとか、天国へ行けるとかである。また王女と結婚できるということもある。しかし袋の中に入る主人公は、そんな幸せな身分には自分はなりたくないの、中

誰かに入れ替つてくれと言つてうまく相手をだまそうとしている。

たとえば、類話(1)では「この樽の中に入れば、みんながおれを村長さんにするつていつてるんだよ。だけどおれはいやなんだ」。類話(2)では「おれは読み書きができるんだ。それにアルコールも強くないんだ。だからローマの皇帝になんてなれないよ」とわめいている。ここでは現実の人間なら持つてゐるはずの名誉心が弱められており、主人公は笑い話にふさわしい人物像になつてゐる。それに対して日本の類話では極めてまじめな雰囲気の中で話が進む。たとえば類話(5)では盲人が「俺やあ、子供の時から目が見えんでなあ、そがして、面白え事も無いに、死なれもせず、生きとるだいいな」と言うと、主人公がこう答える「おう、だつたらあのう、この袋ん中あ入とつてみなはれ。そがするちゅうと、じき目が見えるようになる」。

「僕に入れば、眼病がなおる」というモチーフには日本の民間信仰の色彩が色濃く残つており、現実の庶民の生活のレベルに近い。それに対して、「袋に入れば、皇帝になれる」というモチーフは現実性がなく、笑い話の中でのみ許される抽象的なモチーフなのである。

七 水の中から家畜（魚）を得ようと して、金持百姓が水にとび込む

（全類話）

主人公は金持百姓に水の底から羊（または魚）をたくさんとつてきたと自慢する。ヨーロッパの類話では、いずれも「水の底には、牧草地があつて、羊が草をはんでいる。そこから、こんなにたくさ

んの羊を取つて来たんだ」と誇らしげに言う。だが、そもそも水の底から羊を取つてくるというモチーフは実にファンタスティックである。しかしながら魚を取つてくるのは、ごくあたり前の世俗的モチーフである。しかし、このモチーフもよく観察してみると、超越的モチーフと並存していることがわかる。たとえば、類話(4)では主人公は「おかげであれから淵の底へ行くと、とても立派な御館^{ミツカニ}があつて、そこにきれいな女がいて、八十八さん、お前さんはよくここに来てくれたと言つて、こんな牛だの魚だのもらつて来た」と言う。類話(5)でも主人公は「水の底には、良え所^{ヨシコト}がありましてなあ、とてもそのう、俺一人で、ああいう所に行くなあ勿体ないで、旦那さんも一緒に連れへ來たで、あんたもひとつ、あの袋ん中に^{ハサ}、海の水ん中い入つてみなはらんか。そがするちゅうと、こがあなそのう、なんだ、世間、そのう、ごちやごちやした、ような所へ居らあでもええぜ」と言う。ここには、竜宮訪問のモチーフが見てとれる。浦島伝説によると、不老不死の理想郷が海の底にあるという。ヨーロッパの主人公は羊の群れを取つて来て、この世で富を得て暮らすよう相手にすすめるが、日本の主人公はこの世の苦しみから抜け出て、海の底の竜宮で永遠に幸せに暮すようにと相手にすすめる。

そのあと、金持百姓が海にとび込むことになるのだが、ヨーロッパの類話では村人全員が入水する。それにもかかわらず、そこにはユーモラスな光景が展開する。類話(1)では水に映つたわ雲を見て、川の庭に羊がいるんだと信じて、村長がまつ先にとび込むし、類話(2)では、人がとび込むと「ルプ、ルプ」と音を立てて沈むが、それを他の者は、ルベン（雄羊）がいるものと信じ込んで、「ルベン

がいるなら、オゲン（母羊）もいるだらう」と言ってあとにつづく。これに對して、日本のおろかな金持百姓はひとりで入水する。類話(5)では、旦那が、「ああ、そがな良え所なら、俺も行く」と言って飛び込む。旦那は相変わらず「竜宮では幸せに暮らせる」と思っているのである。この世の苦しみからのがれようと、入水するのは悲劇だが、その悲壮感を通り越して喜劇になったのが、日本の笑い話だといえる。

この話の結末はヨーロッパの類話では、村が全滅して、主人公のみが生き残り、財産を継ぐ。日本の類話では財産ばかりでなく、奥さんも失敬してしまう。これは「兄が死ぬと弟は兄嫁と結婚する」という日本の財産相続制を反映しているのかもしれない。

さらに日本の類話では最後に教訓を付け加えることが多い。類話(5)では「とんちのええ者はなあ、いつの世でも出世するだあぜ」と言い、類話(6)では「そこで、人間は、あんまり兄弟といえども心許されず、人を信じてはならず、ある程度は信じねばならんし、そこ

の程度をようく、じいっと考えて、物事を進まんと、いけないとい

うまあ、たとえ話です」と結ぶのである。

八 おわりに

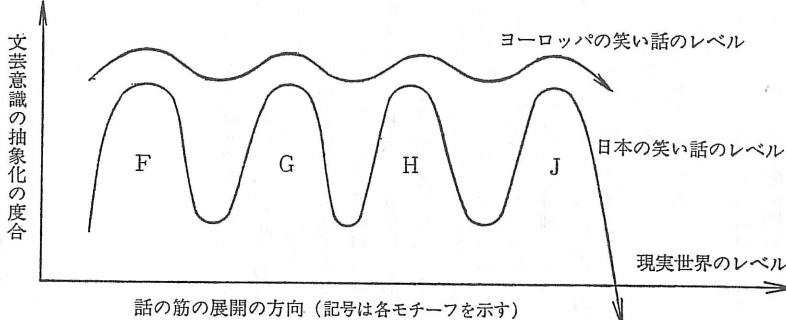
以上みてきたように、日本の笑い話はヨーロッパの笑い話ほどには、洗鍊された文芸上の「ジャンルとして結実していない」といえる。なぜなら、医薬師や浦島伝説にみられる民間信仰のモチーフや、噂や富への強い志向にみられる世俗的モチーフなどが、かなり直接的な形で笑い話の中にあらわれている。ところが、ヨーロッパの類話においては、宗教的モチーフも、世俗的モチーフも、笑い話の中に

取り込まれると、その本来の色彩は弱められ、純化作用を受け、抽象的なものになつている。だから川底から羊を取つてくることも、袋に入れば皇帝になることも可能となる。また医者でさえ、「あのばあをひき殺してしまえ」と言うことができるし、僧侶もぬけぬけと、不貞の関係を弁解することができる。このようにヨーロッパの類話では人物の性格が笑い話にふさわしいものになっている。

日本人は笑い話を語つても、あるいは聴いても、それを單なる笑い話として笑いとはせない。たえずそのウラを意識する。だから結末には處世訓もつけざるをえないのである。笑い話は類話(6)の結末にあるごとく、まさににある處世訓を聞き手に悟らせるための「たとえ話」なのである。このように日本人が笑い話というジャンルに対して期待する文芸意識のレベルは、現実の生活のレベルと表裏一体の関係にある。これは、あえて飛躍を恐れず言うなら、主觀と客觀とが混然としている日本人の精神構造を反映しているのかもしだい。

以上を整理して図式すると、次の図のようになる。類話であるかぎり、日欧類話の基本的な話の筋は変わらない。つまり、主人公の行動はほぼ一致している。図では各モチーフの山の部分がこれに当たる。しかし、その行動の理由付けにおいて、日欧類話の大きな違い、民族による差異が生ずるのである。図の各モチーフの谷の部分がこれにあたる。日本の類話では行動の理由付けの部分、つまり図の谷の部分で、現実世界のレベルに向つて大きく揺れる。そして最後に「この話はある處世訓を示すたとえ話である」と締めくくられると、話は完全に現実世界のレベルに降りるのである。

ヨーロッパの類話では、「医者と殺人」、「牧師と不倫」、「袋と皇帝」、「川と羊」に示されるように、登場人物、小道具などすべての



要素が、純化作用により本来の性質を失ない、現実世界では考えられないような極端な（従つて抽象的な）組み合わせを形成している。これに対して、日本の類話では「川と魚」「俵薬師と盲人」に示されるように、現実に納得のいく組み合わせによって笑い話の世界が形成されているのである。

ここで結論に入るが、日本の口承文芸はヨーロッパの文芸意識でみると、ジャンル的に未分化であるといえよう。つまり、昔話というジャンルも、ヨーロッパの昔話ほどには、昔話的な、典型的な特質を備えていないといえる。これが、「日本の昔話はすぐれて伝説的である」とか、「ヨーロッパの昔話に比べて現実性を帯びている」と、欧米の昔話研究者から指摘される所以である。

（たけはら
たけしげ）